２０１２／０２／０５　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：良き社会人であれ３
聖書箇所：ローマ人への手紙　１３章６－７

先週の日曜日はアメリカのメンフィスにおりました。非常に大きなバプテスト教会なのですが、すばらしい祝福に与りました。それは、教会が悔い改めたことです。恐らく、５０００人以上が入るほどの大きな教会です。その教会が主の前に悔い改めたのです。何が起こったのか？この教会は１０年間に三名の牧師を追い出したのです。雇っては追い出し、雇っては追い出し、雇っては追い出しのです。その牧師たちに何か問題があったのではありません。それぞれがすばらしい働きをされました。ある者は宣教の働きを熱心に、ある者は若者たちへの伝道を熱心に行なっていました。問題は教会の創立者にあったのです。何人かの人たちがその教会を建て上げたのです。そして、彼らが気に入らない牧師であれば、人々を巻き込んでその牧師たちを追い出していったのです。数年前にこの教会に招かれた新しい牧師は、ちょうど先週の日曜日の夕拝にあって次のようなことを言われました。これまでの三人の牧師をその夕拝に招いて、彼は教会員に次のように語ったのです。教会は本来、主なる神の栄光を現わすところなのに、この教会がこれまで行なってきたことは、この地域の人々に悪い証をもたらした。その罪を告白し悔い改めなければならない。今、罪の赦しを求める者はこの礼拝堂の前に出て来て、主にその罪を告白し、牧師たちとの和解を求めなさいと。私はこれを聞いたときに、恐らくだれも出て来ないのではないかと思いました。しかし、アメリカです。祝されている理由がそこにあります。彼らは人目を気にすることなく、主に示されたとおりに前に出て悔い改めを行なうのです。私が後ろから見ていると、何人かの人たちがその立った三人の牧師たちのところに行って、ハグしながらことばを交わしていました。この夕拝が始まる前に、この牧師は私にこのようなことを言ってくれました。「我々は今晩、神の偉大なみわざを見る。」と。そのとおり、私はその夕拝を見ていて、間違いなくこの教会を神はこれから祝されるとその確信を持ちました。なぜなら、教会がみことばに従うからです。

ヤコブはその大切さについてこのように言っています。ヤコブの手紙１：２５**「ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。」**、ヤコブが言ったことは、事を実行することによってその人は祝されるという神の約束です。もし、あなたが主によって祝されたいと思うなら、主に喜んでいただきたいと願うなら、主の栄光を現わしたいと願うなら、「することはただ一つ」です。主のみことばに従うことです。みことばを実践すること以外に主を喜ばせることはありません。主が教えてくださったことをその通りに行なうこと以外に、主を喜ばせること、主に喜んでいただくことはないのです。なぜなら、私たちはそのような人へと生まれ変わったからです。主の栄光を現わしたい、主を喜ばせることが喜びであるという、そういう生きる目的と強い願望をもって歩む者へと私たちは生まれ変わったからです。なぜなら、救いとは生まれ変わることだからです。ゆえに、その人は救われる前とは全く異なる生き方を始める者なのです。

ジョン・マッカーサー先生はこのように言います。「途方もなく大きな救いの奇跡は、信者の生活に係わるあらゆる関係に影響を及ぼす。」と。救いに与った者たちは生活が変わります。すべての分野にその影響が及ぶのです。それほど救いには力があります。救いというのはあなたを造り変えます。だから、ヤコブは次のように言うのです。ヤコブ２：１８**「私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」**と。ヤコブは知っていたのです。本物の信仰にはそれを証明する行ないが伴うということを。本当の救い、神が与えてくださる救いにはその証拠が必ず伴うということです。ですから、ヤコブは同じ２：１７でこういいます。**「それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」**と。また、２：２６にも**「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。」**。新しく生まれ変わった者たち、主によって救われた者たちは、主に喜ばれる生き方をしたいと思います。主の栄光を現わしていきたいと願っているのです。どのようにしてそれをするのでしょう？神のみことばに従うことしかその願いを果たす方法はありません。

パウロは、この１２章から私たちに、救われた人の人生、救われた者にふさわしい生き方とはどういう生き方なのかを我々に教えてくれています。救われた者が歩んでいくその生き方、それは救われたことを主に感謝しながら生きることでした。そのことを我々は何度も繰り返して学んできました。主への感謝をもってすべてのことを為しなさいと言うのです。すべてのこと、家庭においても職場においても学校においても、通勤通学の途中にあっても、どこにあっても何をしていようと、すべてあなたの為すことは、神への感謝として為していきなさいと。そこでパウロは私たちに、特に、教会においてそれは

どのように生きることなのか具体的に教えてくれました。対人関係において、感謝を現わす生き方とはどのような生き方なのか、彼はそのことを教えてくれました。そして同時に、そのように歩みなさいと実践を勧めてくれました。　そして、この１３章に入ると、立てられたこの社会のリーダーたちを私たち信仰者はどのように受け止め、どのように彼らと接していくのかについて教えてくれています。そして、我々が今日見ようとしている６節、７節のところでは、我々の義務についてパウロは教えるのです。市民として、国民としての責任、その義務について彼はここに大切なことを記してくれています。

☆市民としての私たちの責任と義務

今から我々は二つのことを見ていきます。義務を果たす理由と、そして、我々に与えられている義務です。なぜ、私たちはそのような義務を果たすことが必要なのか、そして、果たすべき義務とはどういう義務なのか、その二つのことをこの６、７節からごいっしょに見ていきます。

Ａ．義務を果たす理由　　６節

６節に**「同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。」**とあります。７節を見ても分かりますが、まず、少なくとも我々の義務の一つは**「みつぎを納める」**ということです。後で説明しますが、要するに税金を払うということです。なぜ、そのような義務を果たす必要があるのか、果たすべきなのか、その理由がパウロによってここに記されています。続いて、**「彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。」**とあり、つまり、上に立てられたリーダーたちだからです。国民によって選ばれ、そして、私たちの上に立って政治を行なっている者たちです。皆さんから税金を徴収する者たちです。そのような人々に対して主は何と教えているか？彼らは**「神のしもべ」**だと言っています。実は、このことばは４節にも出て来ました。**「それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。」**と。確かに、日本語では同じことばが記されていますが、ここでは違うギリシャ語が使われているのです。

・４節の「神のしもべ」＝権威者たち、上に立つ者たちは、神の目的を果たす務めを与えられている働き人のこと。

・６節の「神のしもべ」＝ローマ１５：１６に出て来ますが、パウロ自身が自分のことを「主のしもべ」と呼んでいます。また、主に仕える人のことです。ヘブル書の中では、「神に仕える者」、「聖所で仕えておられる方」とあります。

このような意味をもったことばをパウロはここで使っているのです。

ですから、４節では「神の目的を果たす者たち」と言い、この６節では、この「上に立つ者たち」とは「神に仕える者たち」であると言うのです。もちろん、我々が政治家に「あなたたちは生ける真の神に仕える者たちですか？」と聞くと、殆どの人たちが「ノー」と言います。私たちの言っていることが全く分からないはずです。しかし、少なくとも、私たちは４節のところから見て来たように、彼らは神が望んでおられることを実際に私たちのためにやっているのです。二つのことを見て来ました。

◎上に立つ者の務め

１．国民がより良い生活をするため

国民の益のために彼らは労しているのです。確かに、私たちにも言い分があるかもしれません。しかし、彼らはその目的のためにやっているのです。国民がより良い生活をするためにどうしたら良いのか考えているのです。それは私たちの考えていることと違うことを、マスコミを通して聞いているかもしれません。でも少なくとも、上に立つ者はそのようなことを考えて一生懸命に、確かに、難しい仕事ですが、その目的のために彼らはやっているのです。本来なら、どこの国でもその目的のために、自分たちの国民のために、彼らの益のために働いている者たちです。

２．安全に生活できるため

二つ目は、悪がはびこるのを防ぐために彼らは労するのです。この国にどんどん悪がはびこっていかないために、彼らは労しているのです。私たちが安全に生活できるためにです。ですから、少なくとも我々がそのことを覚えることによって、彼らがそのように認識していなくても神は言われるのです。「わたしが彼らを立てたのだ。わたしの目的を果たすために。」と。そのことパウロはここで繰り返しているのです。ですから、そのような「神のしもべ」であり「主に仕える者たち」を、市民が国民がサポートすることは当然の義務だとパウロは言うのです。だから、７節の初めに**「あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。」**とある通りです。この**「だれにでも」**とは「すべての人」を指しているのではありません。文脈を見ると明らかに、これは「上に立つ権威をもった人たち」です。彼らに対してあなたたちはしっかりと義務を果たしなさいと言うのです。

また、この**「果たしなさい」**ということばも非常に興味深いことばをパウロは使っています。こうして一つひとつのことばを見ていくときに、パウロがどんな人だったのか、どんなことを考えていたのか、少なくとも、私たちは知ることができます。ここで使われているこの**「果たす」**ということばですが、こ

れは新約聖書の中に３回出て来ます。どれも同じ出来事の場面でこのことばが出て来るのですが、見てください。ちょうど、イエスが弟子たちと話しておられたとき、イエスは１枚のデナリ貨を持って来させました。そのときに、イエスは弟子たちにこのような質問するのです。**「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」**（マタイ２２：２０）と。そのデナリ硬貨を見たときに、そこにはカイザル、すなわち、シーザーの肖像が描かれている訳です。そこで弟子たちとこのように言い合います。２１節**「彼らは、「カイザルのです。」と言った。そこで、イエスは言われた。「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」**と。同じことが、マルコ１２：１７、ルカ２０：２５にも記されています。ここに記されている**「返しなさい。」**ということばが、今、私たちが見ているこのローマ書の**「果たす」**ということばと同じギリシャ語が使われているのです。

つまり、パウロはこのローマ書で**「義務を果たしなさい。」**と言ったとき、これは私たちの選択だと言っているのではありません。してもしなくてもいいことだと言っているのではないのです。**「果たしなさい」**ということばは、マタイ、マルコ、ルカの中では**「返しなさい」**、これは「借りたものを返す」という意味です。借りたものだから絶対に返さなければいけません。これはしてもしなくてもいいものではありません。借りたものだから、しなければいけないことです。だから、「義務」なのです。ですから、パウロは、人々の上に立つ権威のある者たちに対してどうしても義務を果たさなければいけない。あなたたちは彼らから借りたのだから返さなければいけないと言うのです。ゆえに、「みつぎを納めること」、「税金を納めること」はどうしてもしなければいけないことだ。なぜなら、彼らは神のしもべだから、神が立てられた者たちだから、彼らをしっかりと支えていく責任があるということを言うのです。

Ｂ．国民の三つの義務　　７節

そして、二つ目は「国民の義務」です。ここには三つの義務が記されています。７節**「あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい。」**。

１．税を納める

「みつぎ」と「税」はよく似ていますが違うことばです。

１）みつぎ

実は、この「みつぎ」とは税金には違いないのですが、支配下にある人、だれかによって支配されている人が、自分たちを支配している者たちに支払う税金のことなのです。この当時のことを思い出してください。ローマが支配していました。ですから、ローマ帝国に対して支払う税金のことです。一般的には、これは「所得」や、それぞれの持っている「財産」にかけられる税金だと言われています。今で言うなら「所得税」、「固定資産税」と似たものです。そのような税金があったのです。

ちょうど今話していることが、ルカの福音書２０章の中に、イエス・キリストを試そうとやって来た人たちのことが記されています。彼らが言いたかったことは「税金」についてです。２０：２２に**「ところで、私たちが、カイザルに税金を納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」**とあります。もちろん、この背後にはイエスを陥れようとする律法学者、パリサイ人の企みがあったのです。ですから、その次の２３節には**「イエスはそのたくらみを見抜いて彼らに言われた。」**とあります。つまり、彼らは素直に聞こうとしたのではなかったのです。でも、質問の内容は**「ところで、私たちが、カイザルに税金を納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」**でした。「カイザル」というローマの皇帝に対して税金を納めることがこの当時は存在していたのです。少なくとも、そのことだけは分かります。そのような税金があったのです。パウロはここでそれを「みつぎ」と呼んでいるのです。ですから、そのように皇帝に、ローマ帝国に送る直接税です。

２）税

また、もう一つの税がありました。それは７節に記されている**「税を納めなければならない人には税を納め、」**の「税」です。これは商品などにかけられる税金のことです。今で言うなら「関税」です。何か物を輸入するときにそこに税金がかかります。そのような税が存在していたのです。パウロはこの７節で、「みつぎ」という税金のことと「税」ということと違ったことばを用いています。それは、この当時、存在していたすべての税金を含むことを意味しているからです。パウロが言いたかったことは、どんな税金であってもそのすべての税金に対して、クリスチャンたちはどのように扱うべきなのかということです。

私たちはこのような税金ということを考えたときに、何となく、比較的新しい時代に出たと思うのですが、実は、聖書を見ると、創世記に記されているヨセフの時代に、ヨセフはそのような税を納めていることが分かります。エジプトもカナンの地にも大変なききんが起こりました。ですから、人々は食べ物のあったエジプトのヨセフのところに出向いて来るのです。ヤコブもそうでした。その子どもたちもそうでした。余りにもききんが酷かったために、彼らは様々な物をエジプトに売って食料を得ようとす

るのです。創世記４７章を見ると、人々は自分の農地を売って食料を得ようとしていたようです。それ程ききんが酷かったのです。農夫が自分の農地を売るということは大変な決断です。そこで、その農夫たちに対してヨセフは王であるパロのためにその農地を買い取るのです。そのやり取りが４７章に記されています。４７：２３－２６**「:23 ヨセフは民に言った。「私は、今、あなたがたとあなたがたの土地を買い取って、パロのものとしたのだから。さあ、ここにあなたがたへの種がある。これを地に蒔かなければならない。:24 収穫の時になったら、その五分の一はパロに納め、五分の四はあなたがたのものとし、畑の種のため、またあなたがたの食糧のため、またあなたがたの家族の者のため、またあなたがたの幼い子どもたちの食糧としなければならない。」**、このように収穫の中からこれだけは王に納めなさいと決めているのです。**「:25 すると彼らは言った。「あなたさまは私たちを生かしてくださいました。私たちは、あなたのお恵みをいただいてパロの奴隷となりましょう。」:26 ヨセフはエジプトの土地について、五分の一はパロのものとしなくてはならないとの一つのおきてを定めた。これは今日に及んでいる。ただし祭司の土地だけはパロのものとならなかった。」**と、このような法律を定めたのです。

ですから、物を納める、税を納めるということはこの頃から起こっているということを、私たちは聖書の中に見ることができます。パウロは「税金をしっかりと納めていきなさい」ということを勧めるのです。たとえ、それがどんな税であったとしてもそうしなさいと言います。もちろん、このような命令を聞いて、その当時の人々はどんな反応をしたのかと考えます。私たちは今、新聞を読んだりニュースを聞くと、消費税が上がることに対して反対の声が至るところから出ています。恐らく、その当時でも税に関していろいろな考え方があったでしょう。彼らも私たちによく似て、税金を納めることに躊躇するという思いもあったはずです。というのは、恐らく、次の三つの理由が考えられるからです。

◎納税への躊躇があったその理由

（１）高額

その一つは税金の額が非常に高額であったということがあります。先ほども話したように、ローマ帝国が徴税したのは約１％と言われています。ローマの関心はそれだけだったのです。約１％の税金が入って来たらそれで良かったのです。これだけなら問題はなかったのですが、問題はここからなのです。その帝国に納める税金の上に、それぞれの属州が自分たちの税金を上乗せしたのです。また、それ以外にも属州は人々から関税を取り立てたのです。ですから、税金の額が非常に高くなったのです。ローマ帝国は１％さえ納めているなら、あとどれだけの税金を取るかは気にしなかったのです。

税金はどのように使われたのでしょう？今から二千年前のことです。ローマでもその属州でも道路の整備や政治の運営に使われているのです。今とよく似ています。また、当時のローマ軍や、皇帝崇拝をするための宮の維持費にもその税金は使われたのです。軍事費に使われたのです。確かに、このようなことに税金は使われたのですが、税金の額が高いと支払うことに対して躊躇するのはよく分かります。私たちもそれと同じことを経験しているからです。

（２）テロへの恐れ

今の私たちはそのようなことは経験しませんが、実は、この当時にはそのような恐れを抱かせる原因がありました。ユダヤ人は非常に反抗的でした。特に、このパレスチナやガリラヤにおいては、絶えず暴動が起こっていたのです。その中に熱心党と言われるグループがいました。これは前にも話しました。バークレーはその当時のことについてこのように記しています。「この熱心党ですが、彼らはユダヤ人には神以外のいかなる王もいないこと、また、神以外のだれにもささげものを納めるべきではないことを確信していました。」と。彼らは神だけ、神以外のものに何かを納めることは絶対にしてはならないことと思っていたのです。彼らは自分自身を救うために、熱狂的行動に乗り出さなければ神は助けてくださらないと信じていたのです。変な考えですね。自分自身を救うために熱狂的行動に乗り出さなければ神は我々を救ってくれないと、そんなふうに彼らは思っていたのです。彼らは殺害と暗殺の生き方を誓約させられました。彼らの目的はいかなる公的支配をも不可能にすることだったのです。彼らは短剣の所持者として知られていました。彼らはテロ行為の手段を誓った偏狭的な国家主義者だったのです。彼らはローマ政府に対してテロ行為を用いただけでなく、ローマ政府に対してみつぎを納める同胞ユダヤ人の家族も暗殺し、作物を焼き、家をも破壊したとあります。ですから、自分たちがそう信じているのはまだ許せるとしても、自分たちの信じていることに反すること、つまり、神以外のものにささげものをしている同胞ユダヤ人たちを放っておかなかったのです。そのような人たちを見つけたら、彼らを殺し、彼らの作物を焼き、彼らの家も破壊したのです。非常に熱狂的な国家主義者、まさに、今のことばを使うなら「テロリスト」です。彼らはこのようなことを実際に行なったのです。

どうですか、皆さん、あなたが定められた税金を納めることによって殺されるかもしれない、家が焼かれるかもしれないとするなら、当然、税金を払うことに躊躇しますね。そのような時代だったのです。そこでパウロは、そのような時代であっても、そのような恐れがあったとしても、あなたたちはこの社

会に住む者としての責任をしっかりと果たしなさい。あなたたちは自分の義務を果たさなければならないと、そのように教えるのです。

◎主イエスの模範

なぜなら、イエスはそのようにされました。イエスもその時代にいたのです。その時代にいて、イエスはそのように自分のいのちが狙われて、自分のいのちが彼らに奪われるようなことを恐れながら為すべきことをしなかったでしょうか？彼はきちんと為すべきことをされました。覚えておられますか？マタイ１７：２４－２７に記されていますが、イエスと弟子たちがカペナウムにやって来たときに、宮の納入金を集める者がペテロの所に来てこのように質問をします。２４節**「あなたがたの先生は、宮の納入金を納めないのですか。」**、宮とは神殿です。そこで神を礼拝するのです。ペテロは**「:25 彼は「納めます。」**と答えます。そして、ペテロが家に入ると主イエスご自身が話し始めるのです。**「と言って、家にはいると、先にイエスのほうからこう言い出された。「シモン。どう思いますか。世の王たちはだれから税や貢を取り立てますか。自分の子どもたちからですか、それともほかの人たちからですか。」:26 ペテロが「ほかの人たちからです。」と言うと、イエスは言われた。「では、子どもたちにはその義務がないのです。」**、王は自分の子どもから税を徴収しません。神は子なる神であるわたしから税を徴収なさることはないと言われたのです。**「:27 しかし、彼らにつまずきを与えないために、湖に行って釣りをして、最初に釣れた魚を取りなさい。その口をあけるとスタテル一枚が見つかるから、それを取って、わたしとあなたとの分として納めなさい。」**、イエスは人々につまずきを与えることがないようにと、釣りに行ってそこで得たお金で払いなさいと言われたのです。だから、イエスは正しいことだから為さったのです。する必要はありませんでしたが、神の前に正しいことだから為さったのです。確かに、この当時の人々がこの納税に対して躊躇したこと、額のこともあったでしょう。また、このような危険もあったでしょう。もう一つ言えることは、

（３）物惜しみすること

私たちにも同じです。物惜しみするという思いがお金を出すという行為を消極的にさせます。それは税であっても、主にささげる献金であっても同じことが言えます。私たちが神に献金をささげるときに、私たちは自分の心を探りながら出すことが必要です。皆さんもよくご存じのように、Ⅱコリント９：６でパウロはそのことを教えてくれています。**「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」**、パウロはここで主からあなたが祝福をいただこうとするなら、次の三つのことを覚えていなければいけないと言います。

◎主からの祝福は…

ａ）「ささげもの」に比例して与えられる

主からの祝福はあなたのささげものに比例していると言うのです。ですから、**「少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」**と言うのです。喜んで犠牲的に主にささげる者は、主からたくさんいただくということです。多くの信仰者の皆さんが、今回のアトランタにあってもメンフィスにあっても同じような証を何人からも聞きました。それは「これまでの私は自分の生活に必要なものを給料から取って、残ったものから神さまにささげていました。そのときは喜びがなかったし、いつも生活は困っていました。それが間違っているということが示されて、その後私は、まず、神さまに心に決めた金額をささげましょうと決めました。残ったもので生活しよう。最初、その金額を見たときに果たしてこれで生活ができるのかと思いました。ところが、神さまはちゃんと必要を与え続けてくださった。しかも、それだけでなく、心が喜んでいます。」と、恐らく、アメリカだけでなくこの中にも多くの皆さんが「アーメン」とおっしゃるでしょう。「そのとおりです！」とおっしゃるでしょう。そういう神なのです。そういう約束なのです。主からの祝福というのは、あなたのささげものに比例する。少ししかささげない者は少ししかいただけないということです。

ｂ）「ささげる心」に応じて与えられる

先ほどのⅡコリントの９：７に**「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」**とあります。神は喜んでささげる人に対して喜びをお持ちになるというのです。喜びをもってささげる者を主は喜んでくださるのです。どれだけささげるかではないのです。感謝して喜びをもってあなたがささげるなら主はそれを見て喜んでくださる。もし、私たちの心の中で「これだけささげたらどうなるのだろう？」という不安を持ったり、「ささげなければいけないから嫌だな、これだけのお金があればもう少し〇〇ができるのにな…」と、そのように思いながらやっているのなら、はっきり言うと、ささげない方がましです。なぜなら、そのささげものを神はお喜びにならないからです。皆さんご存じのように、私たちは神に対して感謝をもって、感謝を現わす訳です。神のくださった数々の祝福に対して我々は感謝しているからです。もし、どこかでそれと違う思いがあるなら、もう一度、私たちは主の恵みを思い出さないといけません。

Ｃ）「主への信頼」に対して与えられる

Ⅱコリント９：８に**「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」**と記されています。つまり、先ほどから見て来ているように、我々が喜んで犠牲的に神にささげるとき、確かに、不安がよぎるかもしれません。どうやって生活できるか？と。でも、我々は神の前に喜んでささげましょう、そして、神の約束を信じましょう、必要を満たしてくださるという約束を信じましょうと、まさに、その犠牲的にささげるというその行為は、その人の主への信頼を現わしているのです。主は、主に信頼を置く者を決して裏切ることはありません。それが神です。パウロはそのことを言うのです。**「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、」**と、もちろん、物質面だけのことではありません。すべてのことにおいてです。物があってもなくても満ち足りたその満足をもって生きていくことは私たちに可能なのです。そうして我々は生きていくことができると。

主からの祝福が約束されています。ささげものに比例してそれは与えられます。ささげる心に応じて与えられます。また、主への信頼に対して与えられます。パウロはここで私たちに「税を納めるというその義務を果たしなさい」と言いました。あなたがどんな状況にあるのか分かりません。どんな境遇に置かれているのか分かりません。しかし、少なくとも言えることは、これはあなたの選択ではなくて、これはあなたの義務である、「しなさい」、主が望んでいらっしゃることだからと言います。あと二つのことが義務としてあげられています。ローマ人への手紙１３章に戻ってください。

２．畏敬の念を抱く

「みつぎ」と「税」のことを話した後、**「恐れなければならない人を恐れ」**とあります。これはだれのことですか？今まで見て来ているように「上に立つ権威」です。私たちを治めている人たちのことです。その人たちに対してパウロは「恐れなければならない人を恐れなさい。」と言います。この「恐れ」ということばは「恐れ敬う」ということです。畏敬のことです。畏敬の念を抱きなさいということです。

ペテロがⅠペテロ２：１３－１７でこのように言っています。**「人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、:14 また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。:15 というのは、善を行なって、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。:16 あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。:17 すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。」**主のしもべだから、神のお立てになった者たちだから、その人たちに対して畏敬の念を抱きなさいということです。

３．敬意を表わす

７節の最後に**「敬わなければならない人を敬いなさい。」**、尊敬を払いなさい、敬意を表わしなさいと言うのです。この二番目と三番目の「恐れ」と「敬い」ということばはよく似たことばです。パウロがここで強調したいことは、この人たちは主のしもべだから、私たちはそれにふさわしい態度をもって彼らを扱うべきだ、彼らに対してその人々にふさわしい尊敬を払うべきだということです。なぜなら、神がお立てになった者たちだからと。恐らく、そのような考え方をもって、例えば、私たちの政治を司っている政治家を見ている人たちは殆どいないでしょう。批判は多いです。しかし、みことばは私たち信仰者はこのようにその人たちを見るべきだと教えているのです。彼らは神によって立てられ、神に仕える者たちだから、そのような尊敬を払いなさいと。自分の応援した候補者であろうとなかろうと関係ないのです。神がお立てになった人たちだから、その人たちに対してふさわしい尊敬を払いなさいということです。人々はそのようにして生きて来たのです。そのようにしてかつての信仰者たちは生きて来たのです。

１６５年頃に殉教した一人の人物、殉教者ユスティノスと呼ばれますが、彼はローマに住んで、その当時、唯一のキリスト教的哲学学校を開設したすばらしい信仰者です。というのは、彼が捕らえられたとき、ローマの長官にこのようなことを言われたのです。この長官はユスティノスに対して「お前の信仰を捨てて、ローマの神々にいけにえをささげるように。」と命じたのです。そのときにユスティノスはこう答えています。「正気な者はだれも本物の信仰から偽りのものに改宗することはない。」と。捕えられたときにこのように語った人物です。彼はその社会にあって、その上に立っている権威者たちに対してどのようなことを言っているか？「どこででも、我々はすべての人よりももっと快く、イエスに教えられたように、王によって定められた人に通常税と特別税を納めるように努めています。我々はただ神のみを礼拝しますが、他の事柄においてはあなたを王として人の支配者として認め、またあなたが王としての権力を持って、健全な見識の所有者として認められるようにと祈りながら、あなたに喜んで仕えます。」と。王たちに対して喜んで仕えていきますと、彼らのために祈っていたのです。彼らは主のしもべだから、主によって立てられた者たちだから、彼らが神の前に正しい選択ができるようにと祈り、そして、私はあなたに喜んで仕えますと言ったのです。

もう一人、テルトゥリアヌスという人物がいます。彼も１６０～２２０年までの人物です。現在のチェニジア、アフリカの北ですが、そこのカルタゴという町の教父であり神学者であった偉大な信仰者です。この人物がこう言います。「我々の主によってその務めに召されていることを信じているので、皇帝を尊敬せざるを得ない。」と。ローマ皇帝です。我らの主によってその務めに召されているゆえに、皇帝を尊敬する。この人たちはこのみことばの教えに従った者たちです。自分の理想とするリーダーだからではなかったのです。神の教えだからそれに従おうとしたのです。

今日、私たちが見て来たように、私たち信仰者にとって一番大切な問題は、私たちは神の言われたことに従うかどうかです。神のみことばに、そして、みこころに従っていくかどうかです。それ以外に主の祝福をいただくすべはないし、それ以外に主の栄光を現わすすべはないのです。あなたが神に喜んでいただきたいと思うなら、あなたが何を望むかはどうでも良いのです。神が何を望んでいらっしゃるかです。どうしたら神を喜ばせることができるのか、それを考えてそれを実践することなのです。そのことをパウロはローマ書の１２章の初めで語って、そして、その生き方を具体的に教えてくれているのです。だから、私たち信仰者は、神の前に何が喜ばれることであって、何が神の前に正しいのか、そのことをいつも考えながらその正しい選択を主に助けをいただきながら為していくのです。**「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」**（ローマ１２：２）と、このようにして私たちは自分を変えてゆくのです。そのような生き方を私たちは選択しながら自らを訓練していくのです。

為すべき正しいことを知っていながらそれを行わなければ…ヤコブは何と言いますか？ヤコブの手紙４：１７**「こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。」**「それはその人の罪だ」と言います。神のみこころを知ってもそれを行わないならそれはあなたの罪だと言います。どんな言い訳をしてもそれは罪なのです。どうしてその人が神の栄光を現わすことができますか？どうしてその人が神に喜ばれる生き方をしていると言えますか？失敗はするものです。失敗に失敗を重ねるものです。我々はそれを主の前に告白しながら、主のみこころに従っていこうとするのです。そうしてあなたも生きておられるでしょう？それならそのように生き続けることです。

この税に関しても、大切なことは、主が定められたことだから私たちはするのです。神はあなたに必要を託してくださっているのです。「わたしのために使いなさい」と。主がこう仰せられるのなら私たちは喜んでそれを用いることです。その信仰を主が喜んでくださるのです。あなたは主の教えに従おうとしているからです。

ダビデがこのようなことを証しています。詩篇４０：５**「わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。」**と。ダビデは神が為さったその恵みのみわざを覚えるとき、何と感謝したらいいのか分からない、余りにもすばらし過ぎてもうことばが足らないと言うのです。きっと、あなたもそのように思われるでしょう。主の恵みを覚えるときに、神さま、なぜここまでこれほど豊かな祝福を私に与え続けてくださるのかと。続いて、６節**「あなたは、いけにえや穀物のささげ物をお喜びにはなりませんでした。あなたは私の耳を開いてくださいました。あなたは、全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、お求めになりませんでした。」**、ダビデは主が為してくださったすばらしいみわざに対して、いけにえや穀物のささげ物をしますが、彼は神はそのようなものは望んでおられないと分かったのです。そのことに気付いたダビデはこのように言います。８節**「わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。」**、ダビデは主の恵みに対して最もふさわしい応答は、神のみこころに徹底的に従って生きること、それ以外にはない、それしか私はこの方に感謝を表わす方法はないと言うのです。これがダビデの心からの願いでした。だから、ダビデはこう言うのです。**「あなたのおしえは私の心のうちにあります。」**と。すばらしいです！ダビデは分かっていたのです。主のみことばに従っていくこと、それが一番神に喜ばれることだと。でも、そのためにはみことばが心のうちになければどのようにして実践できますか？だから、いつも神のみことばを、そのみこころをうちに蓄えてそれに従っていこうとしていたのです。だから、主はダビデを喜んでのです。

どうですか、信仰者の皆さん？あなたの信仰者としての歩みは？神のみこころに対して忠実に従おうとしておられますか？それが神の望んでいることです。それを神はお喜びになるのです。何をするのかに心を奪われるのではなくて、どんな信仰者として私は生きているのか、どんな信仰者に変えられているのか、私は主のみこころに従っているのかどうか、そのことを考えながら歩んでください。税金だけの問題ではありません。すべてのことはそこにつながっています。主のみこころに従う者として、今日生きることです。明日をくださったら、そのようにして明日生きることです。そのときに主が喜ばれ、主の御栄えが現わされます。そんな生き方をしてください！それが主のみこころです。

《考えましょう》

１．良き証人としてこの社会で生きるために、果たさなければならない義務を挙げてください。

２．どうして有権者によって選ばれたリーダーたちを敬うことが正しいことなのでしょう？

３．それが税であろうと、主へのささげ物であろうと、支払うことを躊躇するのはどうしてでしょう？
その理由を挙げてください。